Meiji University Library
署名は検証されていません。
電子署名者：Meiji University Library
DN: cn=Meiji University Library, c=JP
日付：2003.11.17 17:00:12 +09'00'

各種委員会報告

収書委員会

収書委員会は，収書方針の審議，全館的な収書計画の策定，選定基準の決定，蔵書評価等，収書に関する政策決定を行う委員会であり，2000年度は2回開催された。

6月8日の委員会では収書方針の概略説明があり，CD-ROM資料の選定については，提供方式，契約形態，後年度負担の問題があり，研究用図書費などの費目別に図書委員，各委員会と図書館庶務課，資料提供部署である各課参考係と調整を行うこととした。また，賃借契約によるCD-ROM資料や外部データベースの利用契約については，図書費のなかに支払手数料を新設することを了承した。その他に4月より始まった教員による学習用選書委員会の活動報告があった。

2月26日の委員会では，2001年度図書予算配分方針について検討した。支払手数料（2千万円）の新設，図書費の増額（4万円）の報告を受け，学術専門図書費（研究用図書・研究用基礎），学習用図書費，逐次刊行物費の各項目内の配分方式は大幅に変更しないが，未執行の多い研究用図書の執行締切日を早める措置をとり，必要とする費目に振り分けることとした。

支払手数料については，基幹データベースの種類及び対象とする利用者などについての報告があり，費用については今後大学構成員から利用手数料を徴収することも議論された。

除籍基準については，除籍に関する規程，廃棄に関する方法，各部署での運用などについての報告があった。

新聞・雑誌委員会

新聞・雑誌委員会は，新聞・雑誌の収書等について検討する委員会であり，収書委員会の下に位置付けられている。

2000年度は7月24日に会議が開催され，収書に関する基本方針を確認し，継続外国雑誌の見直し，3地区に重複して所蔵している外国雑誌についての所蔵見直し，新規外国雑誌の購入について審議した。

継続外国雑誌については，1998年度から各地区毎にアンケート形式で専任教員の要望を確認していた。2年間に渡る各地区のアンケート結果を踏まえ，2000年度初めに3地区のアンケートを全専任教員に対して行った。これまでは必要性のある雑誌に○を付けるアンケート形式であったが，2000年度に行ったアンケートは，継続希望者数の少ない雑誌を継続中止候補として挙げ，それらに対して各教員の必要性を詳細な意見として求めるものであった。意見については，一点一点確認し，中止決定について教員の理解を求めるとともに慎重に検討した。この結果，89誌の継続を中止が決定し，金額にすると約287万円に相当するものであった。なお，意見のあった雑誌についても，今後継続中止の候補とすることを確認した。

3地区に重複して所蔵している雑誌については，できる限り重複を止めることを確認

した。

特別資料選定委員会

特別資料選定委員会は，複数の学問分野にまたがる基本的な学術資料，学内の学際的な研究グループが必要とする学術資料，学内のユニークな研究プロジェクトが必要とする学術資料，貴重な大型コレクションの 4 つの収集基本方針をふまえて，大型(高額)な特色ある資料を選定する委員会である。

図書館長のもとに図書委員，図書館員あわせて 7 名で構成される。

2000 年度は 6 月 13 日に第一次選定を，12 月 5 日に第二次選定を行った。第一次選定では 12 件の応募から「昭和前期刊行図書 CD 版集成～政治編」「Thomason Tracts」「狩野文庫マイクロ版集成～第 2 門」「明治期婦人伝記文献集成／大正期婦人問題文献集成」「ケインズ文書集」「プランゲ文庫～社会・労働部門」の 6 件を選定した。

第二次選定では第一次選定で不採用となった分と追加応募あわせて 9 件から，「四庫全書存目叢書」「William Jevons: A collection」「ブランカールト：ネーデルランド草木誌ほか」「文字遺産集成」の 4 件を選定した。

アフリカ文庫選定委員会

アフリカ文庫は 1979 年の開設以来(当初はアラブ・アフリカ文庫)，本学の特色あるコレクションの一つとして，毎年，選定委員会により重点項目が決定され，選書・収集が行われている。

選定委員会は図書館長のもとに 6 名の教員により構成される。

2000 年度は 6 月 2 日に委員会を開催した。基本的に従来の方針を踏襲するが，日本語文献，アフリカ地域の地図資料，ブラック・アフリカ研究会の報告書，ル・モンドの CD-ROM 版の収集等についても意見交換を行った。

また 10 月 24 日にはアフリカ文庫イベントとして，“フクウェ・ザウォセとチビテ・グループ”による「タンザニアの伝統音楽～命のふるさとからやってきた躍動の音色～」をリバティホールで開催し，多数の観客が集まり，盛況であった。

学習用図書選書委員会

学習用図書選書委員会は，駿河台，和泉，生田の三地区の学習用選書について協議・調整する機関として設置されたもので，必要に応じて委員会を開催する。各館における学習用図書の選書体制は次のとおりである。

中央図書館は，駿河台地区の各課より選出された委員からなる中央図書館選書委員会（委員長は閲覧課長）を，隔週の金曜日に定例開催し，現物見計いや寄贈図書の選定のほか，全国書誌と東販の新刊情報，図書新聞等によるカタログ選書，シラバス図書の扱い等，選書に係わる諸課題を検討している。

和泉図書館では主にカタログ選書を，生田図書館では現物見計いと指示見計いを担当者を置いて行っている。シラバス図書についても同様である。

また，今年度より教員による学習用選書委員会が発足した。中央，和泉地区では委員会を開催し，推薦図書の依頼を行った。生田地区では図書委員を中心に選書が行われた。

学習用基礎資料選定委員会

学習用基礎資料選定委員会は，図書館として備えて置くべき基本的な資料のうち，特に大型(高額)の資料や，図書館の個性形成に資する特別な資料を計画的に収集するために，設置された委員会で，図書館員5名より構成される。

大型(高額)資料については，通常の学習用予算を超えると判断されたもの，及び長期にわたって継続的に収集すべき資料で，単年度当たりの支払い負担の大きいものを選定する。個性形成に資する資料については次のものが予算化されている。

(1) 明大文庫（中央図書館）

(2) 日本近代文学文庫（和泉図書館）

(3) 地方史・誌（中央図書館）

(4) 地域資料（三地区）

(5) 蘆田古地図（中央図書館）

(6) 女性問題資料

(7) 韓国地方誌（中央図書館）

2000年度は7月13日に開催され，「植民地社会事業関係資料集」「毛利家家系図」「ル・ヴァイヤン／第1・2回アフリカ奥地探検紀行」「ア・トランヴェール・ル・モンド」「キルヒャー／光と影の大いなる技法」「Gmelin」など9件の購入を決定した。

図書館紀要編集委員会

「図書の譜－明治大学図書館紀要－」は，1996年に後藤元館長のもとに創刊号を刊行した。職員の自己研鑽や資質の向上を図るべく研究成果公表の場を用意し，図書館資料の紹介や書誌学研究などを通して利用者サービスにつなげることを目的としている。今年度は第5号を2001年3月16日に刊行した。奇しくも新・中央図書館が開館した慶事すべき日である。

第5号は158頁，内容は以下のとおりである。

①巻頭座談会　明治大学図書館と地域協力のありかた（三枝一雄・浅子清・纐纈公夫・司会斎藤哲）②生涯教育と大学図書館（阪田蓉子）③図書館－絶版の多い時代の研究砦－（恒川隆男）④図書館における人的資源の管理と支援（山下洋史）⑤認知科学－心の哲学へ至る潮流－（石川幹人）⑥最近の認知科学（梅田順一）⑦私立大学図書館協会会長校としての2年間（大野友和）⑧新しい知的財産制度の必要性（今泉一穂訳）⑨本を読む人，読まない人（安藤元雄）⑩心のマッサージ『赤瀬川原平のブータン目撃』（馬場美和）⑪江戸文藝文庫の創設に寄せて－水野稔旧蔵書由来－（内村和至）⑫明治大学図書館所蔵『長谷川雪旦書簡』とその背景（斎藤智美）⑬黒川春村『尾張国解文』研究－近世国学者による古代研究の一例として－（渡辺滋）

広報委員会

広報委員会は，図書館報，図書館利用案内，図書館だより「らいぶ」，図書館ホームページの各編集委員会で構成し，編集責任者のもと企画検討を行い，発行または公開している。

2000年度の活動は，従来の活動方針を奨励しつつ，2001年3月に開館する新・中央図書館に向けての企画検討を進めていった。

図書館報では，特別資料紹介を中心にオンラインジャーナルへの取組みや，韓国の翰林大学校における日本語図書目録データベース構築支援等の報告を載せ，なかでも山手線沿線私立大学図書館コンソーシアムに対する参加や図書の貸出し等の公開を積極的にPRした。そして，2000年度最終号（No.71）では，新・中央図書館の概要を中心に，開館記念展示「蘆田文庫古地図展」開催広告を載せるなど，新たな誌面で締めくくった。

図書館利用案内では，従来の利用方法に新・中央図書館開設による新たな利用方法や略図等を取入れ，写真も大幅に入替えた。なかでもホームページ案内や，オンラインジャーナルの案内を盛込み，内容の充実を図った。

図書館だより「らいぶ」では，利用者に対し一番身近な情報を伝える広報誌としてカレンダーを中心に，前半はCD-ROM資料の利用や図書購入方法を紹介し，日本近代文学文庫の紹介等も取入れた。後半は新中央図書館のオープン前後を写真を交えてアピールすることを全面に取入れ，新入生への紹介で締めくくった

図書館ホームページでは，随時の情報を公開しつつ，新・中央図書館開館に向けてリニューアルを目標に準備作業を行った。更新作業としては，コンテンツの見直し（フレーム技術の導入）や，新たな機能（オンラインによる情報発信や電子図書館機能のページ）の追加および既存機能（カレンダー情報のスピード化）の強化に力を入れた。

広報委員会としては，新・中央図書館の開設に伴い，進展する図書館の動向に対応してゆくとともに，山手線沿線私立大学図書館コンソーシアムや社会人への施設の公開に対するPR準備も考える必要がある。

個人情報の保護に関する監査委員

監査委員は，「図書館における個人情報の保護に関する要綱」（1995年度例規第8号）第10条により，相当の期間内に監査を行い，その結果及び概要を図書館長に報告にしなければならない。

要綱に従い，2000年3月13日に図書館庶務課，和泉図書館の2部署の監査を実施した。各々の部署の「個人情報記載票一覧」に基づき個人情報の内容，管理状況，保存期間経過後の帳票処分方法等の説明を受け，実地の検分を行った。その結果，各々の事項が適正に運用されていることを認めた。

若干の問題点として，「個人情報記載票一覧」の一部分に現状と合致しない帳票名が認められたり，記載内容が現状を適正に表していないものがあったので，改善を求めた。

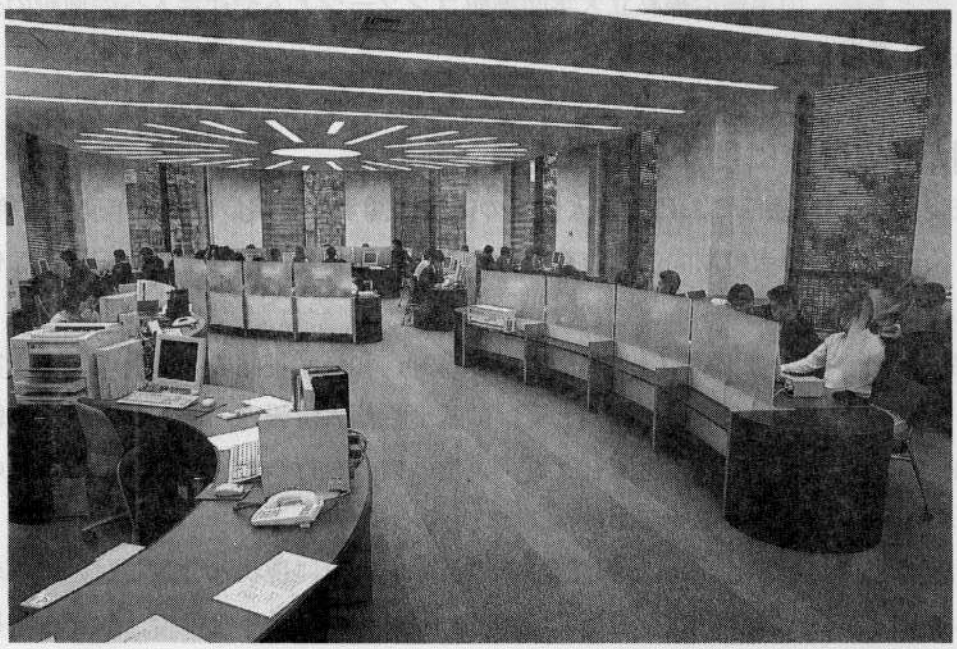
新図書館総合検討委員会

新図書館総合検討委員会は，2001 年 3 月に開館した新・中央図書館のレイアウト，機能，運用計画などについて検討するための委員会であり，1995 年 7 月より事務部長のもとに委員会を置き，様々な課題について鋭意検討を重ねてきた。2001 年 3 月 6 日には最終報告として「新図書館総合検討委員会報告（最終報告書）」を事務部長に提出した。委員会の開催は，140 回におよび，今年は第 112 回（4 月 17 日）から第 140 回（3 月 30 日）の計 29 回が開かれた。

また，課題検討のために委員会の下に各種 WG を設置した。主な WG は①自動書庫②備品③サイン④記念図書館跡地利用⑤地図⑥入館システム対応⑦マルチメディア検討⑧セレモニー委員会などである。他にコピー機の業者選考（プロポーザル方式による業者選考）を行った。委員会での検討結果は，設計図に反映され，新図書館の完成を見るに至った。

新図書館の進捗状況については，「新図書館ニュース」を刊行し，課員への広報を行うことを予定していたが，流動的な事柄が多くタイムリーに発行することは出来なかった。その代わりに「Link together」をはじめとする他の広報手段により，広く新図書館を知らしめるよう，随時広報活動につとめた。また，新図書館新図書館検討委員会の検討内容については，各課の職場研修会で取り上げるとともに，3 月 13 日の職場合同研修会「新・中央図書館の概要及び運用について」で討議された。

新図書館検討委員会は 3 月 30 日をもって解散したが，以後施設関係で発生する諸課題については図書館庶務課が対応し，運用面での諸課題の検討は総合サービス課を中心に行うこととした。



電子図書館仕様検討会

電子図書館仕様検討会は，2001 年 3 月に開館した新・中央図書館の電子図書館機能開発に際し，開発ベンダーである日立製作所と図書館職員，情報システム管理課，情報コンサルのメンバーにより，電子図書館機能を立ち上げるための委員会である。

電子図書館仕様検討会は，2000 年 4 月 26 日から 2001 年 3 月 23 日まで計 32 回開催し，認証機能，電子図書館 OPAC の検索・登録機能，外部データベース支援機能，CD-ROM サーバの利用，プリンタ課金システムなどについて，開館時の稼動に向けて精力的に検討した。

認証機能としては，マルチメディアエリアのパソコンは ID カードなどで認証を行い，外部データベースの利用に際しては，ID とパスワードによる認証を行うこととした。外部データベースについては，学内ネットワークを経由して利用することができる。

電子図書館に登録するコンテンツは，図書館刊行物及び貴重書マイクロフィルムからデジタル化した画像データを登録し，検索システムや登録方法についての検討を行った。今後はコンテンツの充実に向けた検討を行う必要がある。

図書館自己点検評価委員会

図書館自己点検・評価委員会は，教学自己点検・評価委員会からの依頼にもとづき，報告書を作成するための委員会である。

12 月 19 日担当者打合せを行い，自己点検・評価報告書の概要説明，各自の執筆分担を定め，報告書の原案を作成した。

2000 年度の特徴としては，昨年度までの各項目の記述方式を変更し，箇条書き・表形式で作成して，点検・評価項目ごとに 1999 年度の課題・2000 年度の進捗状況・将来の改善・改革方策を記載することとなった。その趣旨は読みやすく解り易い報告書を目指すというであるという。

報告書の原案は，斎藤委員長に報告し，原案の修正後に 3 月 22 日の図書委員会に報告された。斎藤委員長から，新・中央図書館の開館と重なり委員会での議論ができず，図書委員会での審議事項ではなく報告事項としたことの説明があった。

図書委員会での報告をふまえ，一部修正を行った後に報告書を提出した。

なお，法人自己点検・評価報告書は，昨年度の大学基準協会対応項目「勧告 1　図書館の座席数が不足しているので，改善されたい」は新・中央図書館の開館に伴い大幅に改善されたことを記載した。